

第7回日本歴史言語学会

公開シンポジウム『言語系統論の過去（これまで）と未来（これから）』

2017年12月9日（土曜日）13:45-17:30

「趣旨説明」

田口善久（千葉大学）

言語系統論の研究は、系統関係の不明な言語ないし語族間に新たに系統関係を見出すものと、特定の語族に属する言語間の親疎関係を見さだめるものに分けることができる。本シンポジウムでは後者に焦点をあて、これまでの研究を整理し、これからの研究の方向について展望することを目的とする。

19世紀における比較方法の確立以来、世界のさまざまな語族について言語系統に関する研究がすすめられてきたが、21世紀に入り、生物系統学の手法を導入した新しい展開が見られるようになった。このような流れを受け、日本歴史言語学会においても、言語系統論を見直す場を持つことにより、当該分野の発展に寄与したいと考えている。

今回のシンポジウムでは、言語系統論における基礎的モデルとなってきた「系統樹モデル」をテーマとして、言語系統のとらえ方について議論を行う。言語の分類に言及する言語学者なら誰でもが前提としているにもかかわらず、系統樹モデルは、言語学では妥当性の点で常に疑問符がついた存在である。それはなぜか。これにはさまざまな要因があるが、重要なものとして方言連続体と言語接触の問題があげられるだろう。言語特徴の転移がもたらす言語間の複雑な関係は系統樹ではとらえられないが、それを除外した関係図式は言語間の歴史の表示としては妥当なものではないという議論がある。分析の実際においては、言語接触の結果である借用を特定し、排除することが必ずしも容易ではないということもある。また、互いに矛盾しあう可能性のある、異なったレベルのデータの中でどれを重視するのか、恣意的な判断に依存してきた点も指摘できよう。こういった問題について現代の研究者はどのように考えているのだろうか。今回のシンポジウムでは、系統分析や分類に携わってきた言語学者がその実情を語るとともに、統計学の視点から新しい分析や可視化の可能性を提示する。さらに、同じく系統樹モデルを用いる立場にある生物学者から、文化的種の系統論について示唆を受ける。以上の内容をベースにしてパネルディスカッションを行い、今後の言語系統分析のあり方や可視化の方法について議論する。

講演 1

「歴史言語学における系統樹モデルの利用：オーストロネシア語族の事例より」

菊澤律子（国立民族学博物館／総合研究大学院大学）

系統樹モデルは長く、言語の系統関係を示すために使われてきた。同時に水平伝播による変化を反映することができないなど、その限界が古くから知られており、入門書には必ず、代替モデルとして波状モデルが掲載されている。近年、言語変化や言語間の関係について、系統樹モデルでは正しく表現できない例がとくに意識されるようになり、系統樹の一部を变形したり、まったく別のモデルを使ったりする例がみられるようになった。系統樹モデルが不相当だと思われる場面が増えたと思われるようになった要因としては、以下の三点が指摘できる。(1) 方法論の変化、(2) 祖語および祖語のあり方に対する見方の変化、(3) 分析対象となるデータの変化。本講演ではそれぞれについて、具体例をオーストロネシア諸言語の比較再建から示しつつ解説し、歴史言語学と系統樹のこれまでの関係を概観し、これからの展望につなげる。

講演 2

「比較方法と日本語諸方言の系統分析」

平子達也（駒澤大学）

日本語アクセントの史的研究は、その豊富な地理的変異と古文献資料の存在を背景に、古くから比較方法の適用が試みられてきた分野である。琉球諸方言の系統的な位置づけを考える際にアクセントが一つの鍵となるように、アクセントの比較研究を手がかりにして方言間の系統関係を考えることもできる。本発表では、アクセントの比較研究を手がかりにして、方言間の系統関係を明らかにしようとする発表者の試みを示しながら、日本語諸方言、特に本土諸方言に対して比較方法と系統樹モデルを適用する場合に生じる幾つかの問題について述べる。具体的には以下のテーマを扱う予定である。

(1) 系統分析における特定方言群内の変異の扱い方：アクセントから見た出雲方言の系統的な位置づけと出雲方言内部の歴史

(2) 地理的分布と系統樹、「標準語化」と比較方法：「中央式アクセント」と三つの「東京式アクセント」の系統関係

講演 3

「言語系統論への数理的アプローチの可能性」

村脇有吾（京都大学）

Gray らによる印欧祖語年代推定問題への統計的系統樹モデルの適用に代表される近年の歴史言語学への計算的アプローチに対して、不信の念を抱きつつも敷居の高さに困惑する言語学者が少なくないと推測する。そこで、本発表では、まず、近年の研究事例のなかでも代表的な、基礎語彙にもとづく統計的系

統樹モデルを (なるべく直感的理解を助けるように) 解説する。

言語年代学の亡霊がよみがえったかに見える統計モデルは、実際に多くの仮定をおく。一方、接触のようにモデルの仮定に反する現象も広く知られている。そこで、次に、そうした仮定が言語に対して本当に成り立つかを検討する。

最後に、系統論への応用を視野に、言語類型論の特徴の歴史的振る舞いを統計的に分析する発表者の試みを紹介する。本発表を通じて、計算機を用いた統計的手法が、数量、不確実性、解候補の組合せ爆発という人間が苦手とする性質を持つ問題を解くための有力な道具であることを訴えたい。

講演 4

「言語と生物の系統推定を共通の土俵の上で論じる」

三中信宏 (農業環境技術研究所/東京大学)

時空間的な変遷をする実体としての生物と言語の間には基本的なちがいはない。もちろん、進化する実体としてどのような原因で変異が生じるか、いかなる状況のもとで時空間的な変化が生まれるかという点では言語と生物には差異があるだろう。しかし、現在われわれが入手できるさまざまな情報に基づいて過去の系統発生の歴史を推定し復元するという基本目標の設定、および系統推定に用いられる理論や方法論そしてアルゴリズムの点で言語進化と生物進化の間には明白な並行性が歴史的に認められる。構造モデルとしての分岐的なツリーと網状のネットワークは生物と言語の双方に適用される。また、近年の最尤法やベイズ法に基づく統計的言語推定法は、前世紀末以降に生物の分子系統学で開発されてきた手法の言語進化への応用であり、その方法論が妥当であるかどうかは生物系統学と言語系統学の双方で批判的に検討すればよい。生物と言語の進化や系統を論じるための共通の土俵がすでにあるという事実には正面から向かい合うべきだろう。